

# CAMD 報告会

(Center for Development of Advanced Medicine for Dementia)

ミクログリア調節によるアルツハイマー病治療薬の探索

治療薬探索研究部 医薬化合物開発室

今村 真一 室長

平成30年3月8日(木) 16時00分～

第1研究棟2階大会議室

アルツハイマー病 (AD) 発症の最大のリスク因子は加齢であり、日本をはじめ高齢化が進む各国において、その治療法、予防法、検査法の開発は喫緊の課題となっている。

AD の進展には、脳内のアミロイド $\beta$ タンパクやリン酸化タウタンパクの関与が強く示唆されており、それら異常タンパクの生成阻害、凝集阻害、捕捉等による様々な治療法の開発が積極的に進められている。また一方で、アミロイド $\beta$ やリン酸化タウの生成・凝集過程において引き起こされる脳内の炎症反応の調節異常が、AD 病態の進行に大きな影響を与えている可能性が指摘されている。例えば AD 病理において、脳内免疫担当のミクログリアは凝集した異常タンパクへ集積して活性化し、炎症性サイトカインや一酸化窒素等の神経傷害性因子を産生することで、周囲の神経細胞の機能や生存に悪影響を及ぼすと考えられている。

我々はミクログリアの活動を薬剤により適切に調節することにより、脳内の炎症反応をコントロールし AD の治療につなげようと研究を進めている。本報告会では AD と炎症の関わりを概観し、ミクログリア調節による AD 治療薬の探索に関する我々のアプローチを紹介したい。